

植物の身の守り方

植物は動物と違って動かないので、身を守る術はないように思えます。しかし、植物もさまざまな方法や工夫によって進化しながら生き残ってきています。



ヒラドツツジやモチツツジは萼と花柄に腺毛があり粘る。写真はくつついで死んだニホンミツバチ。

化学的防御 有毒物質で身を守る



アジサイは青酸配糖体を含む有毒植物。料理のあしらいに使われることもあるが食べてはいけない。身近な植物にも有毒のものが多いので、てんぷらにするとどんな植物でも食べられるという考えは危険。

生物学的防御 生物を利用して身を守る



キャベツは葉をアオムシに食べられると寄生蜂を呼び寄せる物質を出す。下はアオムシコマユバチに寄生されたモンシロチョウの幼虫。

物理的防御 物理的に身を守る



カラタチの枝は鋭いトゲで武装している。シカのような動物の食害には有効だが、アゲハのような葉を食べる幼虫には効果がない。他にトゲを有する植物には、タラノキ、サイカチ、ジャケツイバラなどがある。



シマトネリコは樹皮が剥がれて、新しい樹皮に更新する。これはカミキリムシなどに樹皮を食害されても致命傷にならずにすむ対策。他に樹皮が剥がれる植物には、カゴノキ、ナツツバキ、サルスベリ、リョウブ、イチイガシなどがある。



シキミはアニサチンを含む有毒植物。その実(右)は中華食材の八角に似ているが、まったくの別物。

タマスダレ(右)やスイセンはリコリンを含む。花のない時期にはニラと似るので誤食する可能性がある。



ヨウシュヤマゴボウはフィトラックタキシンを含む。毒を持つのは一番有効な防御方法。



アオツツラフジはトリロビンを含む。本種を食べるヒメエグリバの幼虫などは解毒する能力がある。

化学擬態 ホルモン類似物質を利用する



アカメガシワは葉のつけ根に蜜腺があり、アリによって身を守る。



カラスノエンドウは托葉の裏に紫褐色の蜜腺があってアリを呼び寄せて防御する。



ヒナタイノコズチは昆虫の蛹化ホルモンに近い物質をつくり、葉を食べた幼虫は脱皮できずに死に至る。

カマキリの仲間

カマキリは小型肉食動物として食物連鎖の大切な役割を担っています。昔から身近な昆虫として親しまれています。しかし、鳥や動物などの捕食者も多く、彼らの世界も決して安泰とは言えません。



コカマキリは褐色型が多い。前肢にある黒色と白点が特徴。近年減少傾向。

ヒメカマキリは体長3cmほどの驚くほど小さなカマキリ。左はその卵しよう。



オオカマキリの卵しようの形は特徴的。



5月下旬、卵しようから前幼が孵化し、すぐに脱皮して1齢幼虫になる。卵しようには近い部分は脱皮殻。



前脚の間は薄い橙黄色。

歩き始めたオオカマキリの子どもたち。無事成虫になれるのはほんの一部。



オオカマキリはアブラゼミのような大型の昆虫も獲物とする。

オオカマキリの雌成虫。後翅には紫褐色の大きな斑紋があるが、閉じているとチョウセンカマキリと区別は難しい。雄は雌より小さく、うまく交尾しないと雌に喰われる。



ハラビロカマキリの褐色型雌(左)と緑色型雌(上)。他のカマキリより腹部の幅が広い。前翅にある淡色斑が特徴。



ハラビロカマキリの卵しようは橢円形をしていて丸みがあるので間違うことはない。



ハラビロカマキリの雌はかなりの割合でハリガネムシに寄生されている。ハリガネムシは袋形動物門に属し、表面は厚いクチクラで覆われ、排泄器はない。化石は石炭紀の地層から出ている。カマキリ類などの腹部内の卵に寄生し、腹端が水に接すると体内に出て水中に入り産卵する。ハリガネムシの幼生はカゲロウの幼虫に寄生して、カゲロウが成虫になってカマキリに捕食されて再びカマキリの体内に入る。



カマキリタマゴカツオブシムシに寄生された卵しよう。



チョウセンカマキリの前脚の間は橙色。複眼にある黒い点は偽瞳孔と言い、常にこちらを向いているように見える。



チョウセンカマキリの卵しようは細長い。



チョウセンカマキリの雌はオオカマキリに似るが、後翅の紫褐色斑が小さい。水田や河原でよく見かける。

ツマグロヒョウモンの生態



ツマグロヒョウモンの幼虫はスミレ科の植物を食べる。路傍のスミレや花壇のビオラにつくことが多い。

ツマグロヒョウモンは分布を北に広げてきている。雌は南方系の毒蝶カバマダラに擬態している。



ツマグロヒョウモンの雄は他のヒョウモン類に似るが、性標がなく後翅の縁が黒い。



交尾するツマグロヒョウモンのペア。交尾したままでも片方の個体をぶら下げて飛ぶことができる。



石に産卵中の雌。本種は直接食草に産卵することもあるが、食草から少し離れた石や木切れに産むことが多い。孵化した幼虫はまず食草までたどり着かねばならず、試練が待っている。



夜間、葉にとまり眠っているツマグロヒョウモンの雄。



さなぎ
蛹には多数の突起や銀色に輝く斑紋がある。また、刺激を受けると体を震わせて防御する。

タチツボスミレの上にいるツマグロヒョウモンの終齢幼虫。



ツマグロヒョウモンの幼虫を狩って肉団子を作るセグロアシナガバチ。かなりの数の幼虫がこうした天敵の餌食になる。



タニウツギの花に来たクマバチ

クマバチは枯木に自ら穴を掘って、花粉を運びこんで卵を産む。外観は穴だけ。



クマバチの巣を断面にすると、外径23mmの枯木に内径15~16mmの穴を上下に10cmずつ掘って10卵産めるようになっている。側面に均一の厚みを残して掘るところは職人技。



カラシナの花で花粉を集めるタイワンタケマバチ。体はほぼ真っ黒。翅には特有の艶がある。



メダケの節のすぐ上をかじる親蜂。竹は1か所穴を開ければよいので効率が良い。羽化した成虫は入口から脱出し、竹が割れるまで何年も再利用される。



入口から親蜂が腹端を出し、アリなどの侵入を防ぐ。



幼虫は花粉団子を食べて育つ。奥の方(左)の幼虫ほど成長が早い。黒い棒状のものはフン。



入口のある部屋は内部からかじって少し広くなつており、親蜂が門番行動をする。



花粉団子を全て食べつくすと、脱皮して蛹となる。羽化が近づくと黒くなる。



羽化したてのタイワンタケマバチの雄。顔が白く、胸部がクリーム色の毛に覆われている。

竹筒を利用するハチ

いろいろな太さの竹を縛っておくとハチの仲間が繁殖に利用します。ハチの種類により好みの太さが違います。また、始めから竹を半分に割って、テープで止めておけば内部を観察することができます。



コクロアナバチは、ツユムシなどのバッタやコオロギの仲間を狩って幼虫の餌とする。植物の繊維で仕切りを作る。

コクロアナバチの巣(左上)と成虫(右上)。本種は竹筒の入口を枯草で塞ぐので分かりやすい。



幼虫が餌を食べつくすと繭^{まゆ}を作つて蛹になり、越冬する。



オオフタオビドロバチは、胸部前縁の黄斑が目立つ。ハマキガなどガ類の幼虫を狩る。



餌を食べつくしたオオフタオビドロバチの幼虫。このまま冬を越して春に蛹化する。



竹筒の口は泥で固める。竹の内径は8mm程度を好む。



バラハキリバチは胸部の黄褐色の毛が目立つ。バラ科の葉を丸く切り取って巣材にする。



オオハキリバチ(左は成虫、上は繭)は25mmほどある日本最大のハキリバチ。巣材には葉を使わずに樹脂を使用する。



カミキリムシの脱出孔を利用したハキリバチ類の巣。



竹筒内のハキリバチ類の巣。

ハラアカヤドリハキリバチはオオハキリバチの完成した巣に入り、オオハキリバチの幼虫がいれば殺して捨て、自分の卵を産んで巣を作り直す労働寄生蜂。



ハチの仲間

ハチの仲間は、日本だけでも4000種以上いると言われています。幼虫の餌だけをみても葉、花粉、蜜、朽木、昆虫、クモ、他のハチなどがあり、その生活様式は実に多様です。生態も社会生活をしたり、寄生をしたりと興味の深い仲間です。



オオモンツチバチは体長25mmほどで、黄色帯に黒斑がある。地中にいるコガネムシ類の幼虫を狩る。



オオホシオナガバチは前翅に斑紋があり、産卵管は体長より少し長い。枯木の中のキバチ類の幼虫に寄生する。



ルリチュウレンジバチ(上)はツツジ類の葉の組織内に産卵する。その幼虫(下)はガの幼虫のように見え、ツツジを食い荒らす。5月から10月まで年3回発生する。



コハナバチ類は種類が非常に多く、素人での同定は困難。地中に枝分かれした育房を作り、幼虫は花粉で育つ。



ムモントックリバチは岩や木の窪みを利用し、平たいトックリ状の巣を作る。シャクガの幼虫を狩り、産卵した後トックリの反り返った部分を壊して入口を塞ぐ。その後コケを含んだ泥で表面をカモフラージュする。



アレチハナガサの花に来たキアシトックリバチ。トックリ状の巣は草の茎に一つだけつける。



アオスジコハナバチは青色が入るので識別しやすい。地中に単房巣を作る。



ミカドトックリバチの秋型(上)は夏型に比べ黄色部が多く、以前は別種と考えられていた。



トックリバチ類の巣。シャクガやメイガ類の幼虫を狩り、産卵後入口を塞ぐ。



スズバチは体長30mmもある最大のトックリバチの仲間。シャクガの幼虫を狩り、トックリ状の巣をいくつか並べ、全体を泥で固めた耐水性のある大きな巣(上)を作る。



マルモンツチスガリは腹部にくびれがあり、黄帯が半円状に欠けるのが特徴。花に来て一見平和そうだが、親戚筋のようなコハナバチ類を狩る。



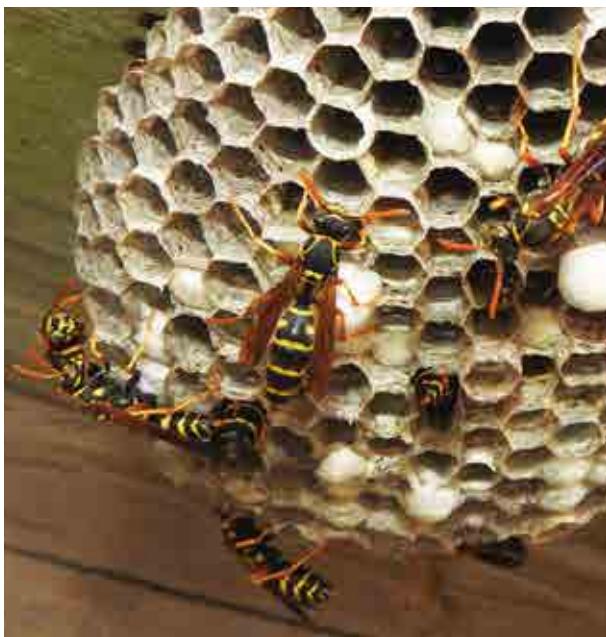
キアシナガバチはセグロアシナガバチに似るが、腰のすぐ上に2黄紋がある。写真では枯葉に集まっているが、これは巣をスズメバチ類に襲われて放棄したためと思われる。



コアシナガバチは腹部の赤茶色の帯が目立つ。気性が強いので、近づかない方が良い。



キアシブトコバチは体長6mm。各所に黄色部があり、湾曲した後脚が特徴的。チョウ目のいろいろな種類の蛹に内部寄生する。



フタモンアシナガバチは腹部の2黄紋が特徴。攻撃性は少ないが直接触ると刺される。原因は分からぬが、近年激減した種。

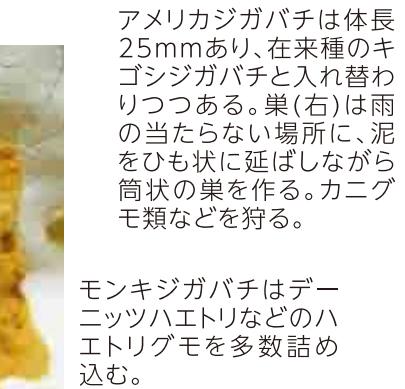


サトジガバチは体長23mmあり、ガ類のイモムシを狩る。この時、イモムシが死ないように神経節をねらって麻酔する。巣は地中に単房巣を作る。土を掘る時、ジガジガと音を立てることが名の由来。ヤマジガバチとよく似ている。



アメリカジガバチは体長25mmあり、在来種のキゴシジガバチと入れ替わりつつある。巣(右)は雨の当たらない場所に、泥をひも状に延ばしながら筒状の巣を作る。カニグモ類などを狩る。

モンキジガバチはデニツツハエトリなどのハエトリグモを多数詰め込む。



セグロアシナガバチ

人家周辺には2000年頃まではフタモンアシナガバチが主流でしたが、それ以降は激減し、セグロアシナガバチがほとんどになりました。



古い竹をかじるセグロアシナガバチの雌。竹や材木の繊維をかじり取り、唾液で固めて巣を作る。

夜間にはほとんどのハチが巣の中に頭を突っ込んで寝ている。

成虫越冬した雌は4月になると巣作りを始める。巣に適した場所は軒下などの雨のあたらない場所。巣の中に卵が見える。



8月の下旬から9月の上旬頃、ヒメスズメバチが巣を襲って幼虫や蛹^{さなむけ}を持ち去ることがある。親蜂は全く抵抗することなく尻込みをし、応戦することはない。親蜂は幼虫や蛹がいなくなると巣を放棄して別の場所に移る。

ベッコウクモバチ



この仲間は以前ベッコウバチ科と呼ばれていたが、クモバチ科に変更された。ベッコウクモバチ(上)は翅が赤褐色なのでベッ甲の名が残っている。ハシリグモ類やコアシダカグモなど大型のクモを狩り、モグラやネズミのトンネルの奥深くに巣を作る。左下はアシダカグモを引く雌。右下は交尾を巡って5頭が団子になって転げまわっているところ。

クロアナバチ



クロアナバチはキリギリス類やコオロギ類を狩る。上はセスジツユムシを前進運動するクロアナバチ。左は巣穴を掘るクロアナバチ。掘った土が白っぽく見える。巣穴は深く、複数の房室があり、外出の際には入口を仮閉鎖する。主坑の近くに偽坑を作る。

テントウムシの仲間

テントウムシと聞くと誰でもナナホシテントウを思いうかべるかもしれません。しかし、ホシの数だけ見ても2,4,6,7,8,9,10,11,13,14,15,16,18,19など実際に多彩な種類がいるのです。



この説明文の周囲にある写真はすべてナミテントウ。とても同一種とは思えない。冬期には集団越冬(第1集P88)するので、やっと納得できる。



ナナホシテントウの幼虫はアブラムシ類を食べて育つ。

ナナホシテントウの蛹。蛹は一週間弱で羽化する。



交尾するナナホシテントウ(上)と羽化したナナホシテントウ(左)。テントウムシとして一番よく知られている。体長は8mm。羽化直後は赤みもなく黒斑も薄い。



ヒメアカボシテントウは体長4mmの小型の普通種。幼虫も成虫もワシロカイガラムシを好んで食べる。



ダンダラテントウは体長6mm。ナミテントウに似るが触角の形が異なる。



ハラグロオオテントウは体長が12mmもある大型の珍しい種類。幼虫、成虫ともにキジラミ類を食べる。

シロホシテントウは体長4mm。幼虫、成虫とともにウドンコ病菌を食べる。

ムツキボシテントウは体長4mmでやや縦長。標本にすると黄色はあせてしまう。

キイロテントウは体長4.5mm。幼虫、成虫ともにウドンコ病菌を食べる。

セミの仲間

平野部では、クマゼミ、アブラゼミ、ニイニイゼミ、ツクツクボウシの4種のセミが主に見られます。セミの世界にも、数の増減や初認日変化が起こっています。セミの羽化は夜間に行われ、実際に神秘的なので一度は観察してみたいものです。



クマゼミの集団。写真の中に11頭が写っている。温暖化による影響か、市街地では増加傾向。シャーシャーと大きな声で午前8時頃によく鳴く。



ニイニイゼミは見事な保護色になっている。以前は七夕の頃が初認日であったが、今では夏至の頃まで早まっている。

枝を登るアブラゼミの幼虫。おおよそ日没時ぐらいため地上に現れる。幼虫期間は6年半と言われることもあるが、飼育実験では2~5年と幅がある。



アブラゼミは茶色の翅が特徴。日中にギーと鳴く。セミ類の交尾を見る機会は非常に少ない。



ツクツクボウシはこの4種の中では一番遅く8月上旬から現れる。市街地では減少している。

ツクツクボウシの雌は腹端が細長いので、外観で雄雌が分かる。



枯れ枝にある産卵痕(上)と枝内部の卵(右)。一カ所の穴の中に約10卵が産みつけられている。



クマゼミと思われる若齢幼虫。樹木だけでなく草の根からも吸汁する。

クマゼミの羽化

木の幹を登る幼虫を見つけても、そこで羽化するとは限らず、高い場所まで行ってしまうことが多い。低い枝で止まって背中が割れかけた幼虫を探すのがベスト。①まず、大きな頭部や胸部が出てくる。②上半身を反らせる。この状態が30分ほど続く。③上体を起こして、殻に前脚でつかまり腹部をぬく。④黄緑色から青色の翅が伸びる。

羽化には全体で2時間ほどかかり、観察会時のように多くの人の目があつた方が、観察しやすい場所で羽化する個体を見つけやすい。

セミの脱皮殻



クマゼミはアブラゼミよりも横幅が広く、腹部に白っぽい筋がはいるのが特徴。



アブラゼミは茶色の光沢が強い。羽化する高さはばらつきが大きい。



ニイニイゼミは小さく、殻に泥が付いている。低い位置で羽化する。



ツクツクボウシは体が細長く、艶のない淡い褐色。背中が大きく開く。比較的低い位置で羽化する。

ツルウメモドキに集まる昆虫



ツルウメモドキはニシキギ科の落葉つる性木本。花期は5~6月。果実は第1集P63。



トンボエダシャクの幼虫。近似種のヒロオビトンボエダシャクの幼虫は、黒斑が黒点状になる。



キバラヘリカメムシの幼虫(左)と成虫(右)。成虫は黄、黒、赤、白とカラフル。ニシキギにもつく。

ヒロオビトンボエダシャクの成虫。これにそっくりのトンボエダシャクは、腹部の黒斑が大きい。成虫は6月に現れる。

ハゴロモの仲間



アオバハゴロモは街中でも最も普通。夏にアジサイなどに発生する。体色には濃淡がある。



Salurnis marginella(和名なし)は2018年に確認された外来種。アオバハゴロモに似るが、前翅の後縁が突出する。



ベッコウハゴロモは2本の透明な帯が特徴。翅をやや立てて止まる。夏から発生する。



アミガサハゴロモは前翅縁の白点が目立つ。翅を立てないで止まる。比較的小ない。

バッタ・コオロギ・キリギリスの仲間

バッタやコオロギの仲間は直翅目ちょくしもくに属し、日本では600種以上が記録されています。また、カマキリ、カワゲラ、ハサミムシ、ゴキブリなども近縁で、合わせて直翅類と呼ぶこともあります。ズムシやマツムシのように特徴的な声で鳴く種類は知られていますが、これらを屋外で観察することはかなり困難です。



コロギスは体長30mm。樹上生活をし、非常に長い触角をもつ。葉を綴って巣を作り幼虫越冬し、夏に成虫が現れる。雌は上に湾曲した特徴的な産卵管をもつ。



ハネナシコロギスは体長15mm。触角は体長の数倍はある。翅はないが、後肢を腹部にこすって発音する。幼虫で越冬。



ヒガシキリギリスはニシキリギリスに比べ前翅がやや短く、斑紋が多い。夏の昼間にギース チョンと鳴く。



ヒメギスは体長25mm。胸部の白線が特徴。湿った草地でシリリと鳴く。



ササキリは体長15mm。黒い縦線が特徴。林の中で秋にジキジキジキと鳴く。



ホシササキリには褐色型(写真)と緑色型がある。前翅に斑点が特徴。日中に草地でジー・ジーと区切って鳴く。



ウスイロササキリは翅が長く産卵管は短い。体長は雌の方が大きくて30mm前後。日中に草地でツルルルルと鳴く。



オナガササキリは体長20mm。雌には剣のような長い産卵管がある。緑色型(写真)と黄褐色型がある。草地で昼間にジリリ・ジリリと区切って鳴く。



ヤブキリは体長50mm。春に孵化した幼虫は最初花弁を食べるが、次第に肉食性に変わる。梅雨時から樹上でシキシキシキと鳴く。



クビキリギスは体長33mm。頭部は三角形に尖る。緑色型と褐色型(写真)があり、成虫越冬する。春の夜に耳鳴りのようにジーーーーと連続して鳴く。



交尾するツチイナゴ。大きな雌は体長が65mm。眼から下に伸びる黒線が特徴。夏に見られる幼虫は緑色。秋に成虫となり、成虫で越冬して初夏にも見られる。



ツツワムシは体長52mm。夜にガシャガシャと大きな声で鳴くが、近年減少している。



ヒメクダマキモドキは体長23mm。海岸や都市公園にいる。雄と雌はシュー・シュー・シュー、ピチ・ピチ・ピチと鳴き交わす。

サトクダマキモドキは体長60mm。前腿節は緑色。秋に出現し、広葉樹の上にいる。雄はピン・ピン・ピンと鳴く。



クルマバッタモドキの雌は体長65mmあるが、雄はずっと小さい。前胸背にX状の白斑があるのが特徴。



ナキイナゴの雄は体長22mm。6月から草地でシャカシャカと鳴く。雌の翅は短い。



トノサマバッタは色彩変異が多い。雌は雄より大きく65mmある。飛翔が得意で体色に合った場所に着地する。



クルマバッタは前胸背が盛り上がるのが特徴。雌は65mmあるが、雄は40mm前後。

ショウリヨウバッタモドキは人の気配を感じるとスルッと草裏に隠れる。



ツマグロツユムシは台湾や中国からの外来昆虫。2008年に大阪府で最初に発見され、四日市市では2013年に記録された。



セスジツユムシは体長22mm。林縁に多い。雄はチツ・チツ・チツジージチージチーと鳴く。



イボバッタは前胸背の上にいぼ状の突起がある。雌は雄より大きさ35mm。

アシグロツユムシは体長17mm。肢は褐色を帯び、触角は所々白い。雄はチーチーと小さな声で鳴く。



ショウリヨウバッタの褐色型の雌。体長は80mmにもなり、色彩には変異が多い。雄は飛翔時にキチキチと鳴く。





ハラオカメコオロギは体長15mm。リリリリリと5~6声で区切って鳴く。



モリオカメコオロギは林内に多く、リーりりりりと5~6声で区切って鳴く。



ツヅレセカオロギはリーリーリーリー…と長く鳴く。晩秋まで鳴き続ける。



エンマコオロギは体長35mmある大型種。お盆のころからコロコロリーと抑揚のある美しい声で鳴く。



マツムシは体長20mm。褐色で肢が長い。有名な鳴く虫で、ピッ・ピリリと鳴き、チン・チロリンと聞きなしされる。



カンタンは体長17mm。体に黒い部分がある。草地の葉の上でルルルルルルといい声で鳴くので有名。



カネタタキは体長10mmほどで、写真上の雌には翅がない。雄(下)には短い黒褐色の翅があり、チン・チン・チンと鳴く。時に家屋内にも入ってくる。



シバスズは体長6mm。体側の黒帯が特徴。公園などの草地に普通。ジーーーと長く鳴くが気づきにくい。

ヤチスズは体長8mm。湿った草地にいる。ジーーーと長めに尻上がりに強く鳴く。



マダラスズは体長7mmと小さいので気づきにくいが草地にたくさんいる。黒斑が明瞭で識別しやすい。ジー・ジーと区切って鳴く。



スズムシはリーン リーンと良い声で鳴くので飼育されることも多い。野生でも普通に鳴き声を聞くことができる。

ヤママユの仲間

ガには多くの種類がありますが、その中にヤママユガ科に属する大型のガがいます。以前はよく見かけたものですが、近年では成虫の姿を見る機会は非常に少なくなっています。



ヤママユの成虫は開長15cmもある大型種。年に1回の発生で、8~9月に出現する。



ヤママユの幼虫はコナラなどの葉の葉柄を半分かじってぐらぐらにしてから食べる。終齢幼虫は6月下旬には10cmにも成長し巨大。



繭は6cmほどの楕円形。繭からは上質の天蚕糸が採れる。繭の口が開いているのは、成虫が無事に羽化した証拠。



シンジュサンの成虫も開長14cmの大型種。5~6月と8~9月に年2回発生する。派手な模様は一度見たら絶対に忘れない。



シンジュサンの幼虫はクロガネモチに発生することが多い。終齢幼虫は8cmほどになり、水色の突起が多数ある。突起は硬く体は柔らかいので、触ると特有の感触がある。



繭は葉を湾曲させて舟のような形になる。枝に糸で固定するので、落葉しても繭は残る。



クスサンの成虫は開長13cmあり、9月の後半から年1回出現する。色には変異がある。



クスサンの幼虫は長毛からシラガタロウと呼ばれる。クリやクヌギを食べる。



繭はスカシダワラと呼ばれ、食樹から離れた場所に移動して作られる。



ウスタビガの成虫は年1回11月に現れる。写真は雄だが、雌は黄色い。



繭は形からヤマカマスと呼ばれ、落葉後によく目立つ。



ヒメヤママユは山地性の種類。成虫は10月に年1回出現する(幼虫は第1集P37)。ヤママユガ科の雄は写真のように櫛ひげ状の触角の幅が広いので簡単に見分けられる。

写真の3齢幼虫はトゲがあるが、終齢になるとトゲは無くなる。コナラやクヌギなどを食べる。

スズメガの仲間

スズメガ科のガは、太い体に細長い前翅をもち、高速で飛翔します。また、自在にホバリングして、長い口吻を伸ばして花の蜜を吸います。幼虫は尾角のある大きなイモムシで、飼育するのも面白いでしょう。

キイロスズメの成虫(左)は腹部の黄色と黄緑が特徴。成虫は5~10月に現れる。幼虫(右上)はヤマノイモ科の植物を食べる。褐色型と緑色型があり、終齢幼虫は10cmほどになる。蛹(右下)は7cmあり、蛹で越冬する。



ウンモンスズメの成虫(左)は緑色を基調としていて美しい。幼虫(上)はケヤキやアキニレを食べるので、普通高所にいて目にする機会は少ない。



エビガラスズメは10cmもある大型のスズメガ。翅を広げると腹部にピンク色の部分がある。幼虫はサツマイモやアサガオを食べる。



トビイロスズメの成虫(左)は褐色を基調とし、波模様がある。幼虫(上)には緑色型と黄色型があるが、写真のような黄色型は稀。フジやクズ、ハギなどマメ科の植物を食べる。

コウチスズメの前翅は地味な色合いだが、後翅には赤、黒、青の大きな目玉模様がある。成虫は初夏から夏に年2回発生する。幼虫はツツジ科の植物を食べる。



オスカシバの成虫(上)は翅が透明で、腹部に赤い帯があるのでハチと間違えられることがある。6~9月に2回発生し、日中敏捷に飛翔する。幼虫(左)はクチナシを食べる。写真のような緑色型と褐色型がある。



クロメンガタスズメ(左)はドクロ模様で有名なメンガタスズメの近似種。後翅や腹部には黄色い部分がある。幼虫はゴマ、ナス、アベリアなど多くの植物を食べ、緑色型、黄色型(写真上)、褐色型がある。尾角の先端はくるっと曲がる。



チバヌズメは前翅が9cmある大型種。6～8月に年2回発生する。幼虫はクリやコナラ、クヌギなどを食べる。



ホシヒメホウジャクは体長35mmほどの小型種。幼虫はヘクソカズラを食べ、緑色型、紫色型、橙色型、緑色無紋型やさらにその中間型がある。



紫色型幼虫

緑色型幼虫

長い口吻を伸ばしてホトトギスから吸蜜するホシヒメホウジャク。幼虫(右)はヘクソカズラを食べ、ホシヒメホウジャクの幼虫に似るが、尾角は短く直線的。



コスズメの幼虫はノブドウやヤブガラシを食べる。成虫はセスジズズメ(P92)に似る



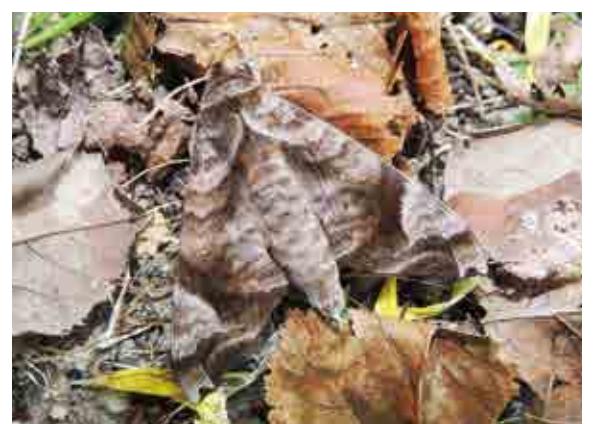
シモフリズズメは前翅が8cmほどある大型種。5～10月に年2回発生する。幼虫はキンモクセイ、クサギ、ネズミモチなどを食べ、緑色型と写真のような紫褐色の入った褐色型がある。



クルマスズメの成虫は正中線がある。6～8月に発生するが数は少ない。幼虫はノブドウやツタを食べる。



ホウジャクはホシヒメホウジャクに似るが、後翅の橙色部分が広い。幼虫はアカネやカワラマツバを食べる珍しい種類。



モモスズメは5～8月に年2回発生する。後翅は桃色。幼虫はバラ科の植物を食べる。

ブドウスズメは落ち葉に見事に擬態している。成虫は4～8月に年2回発生。幼虫はヤブガラシやノブドウを食べる。

薪置き場の生きもの

薪を使う機会は減りましたが、野外炊飯や餅つき、薪ストーブなどでは今も活用されています。薪置き場ではいろいろな生物を観察することができます。



薪の中は隠れ場所として適している。また、幼虫が薪を食べるカミキリムシの仲間なども集まる。



ヒトオビアラゲカミキリは9mmほどの小型のカミキリムシ。成虫は5~7月に現れる。



ヒラタグモの雌(上)とその住居。住居の周囲には放射状の受信糸を伸ばし、昆虫が受信糸に触れると飛び出してきて、多量の糸で捕える。



薪の隙間で集団越冬していたニホンヤモリたち。ヤモリは爬虫類なので変温動物。危険を感じるとジーなどと鳴く。



ニホンヤモリの指の裏には細かな鉤状の毛が生えた鱗があり、これを引っ掛けてガラス面も登ることができる。顔つきや眼の模様は恐竜を連想させる。



エグリトラカミキリは体長12mmほど。淡いエメラルドグリーンのような体色が特徴的。トラカミキリ類では普通種。



ニイジマトラカミキリは体長14mmほど。ハチに擬態している。



ウスイロトラカミキリは体長の変異が大きい。上翅には細く白い3条紋がある。



シミは昆虫綱に属するが、翅がなく無変態。古くは三畳紀の化石が出ている。室内に入ると古い紙などを食べる。



キマワリは朽木の上によく見られる。



ゲジはゲジゲジとも呼ばれムカデに近い仲間。脚は15対あり複眼もある。

住宅地周辺のカタツムリ

住宅地周辺には、イセノナミマイマイやナミコギセルなどのカタツムリが生息しています。春から秋の雨の日には、近所を散歩しながらカタツムリを探してみると新たな発見があるかも知れません。

交接するイセノナミマイマイ。成貝になると殻口が反り返る。殻径は35mm前後。カタツムリは雌雄同体で、交接することにより産卵することができる。



イセノナミマイマイは春に土を掘って産卵する。一度に百数十卵を産む。



イセノナミマイマイの死殻の上にいる幼貝。決して親を懐かしんでいるのではなく、死殻は自分の殻を作る大切なカルシウム源なのだ。成貝になるまでは約26か月を要する。

卵の直径は3mm。産卵から約1ヶ月で孵化する。孵化したての幼貝はまだ殻の巻数が少ない。

看板に残る大型カタツムリのはみ跡。表面の汚れを頭を振りながらかじり取っていく。カタツムリは餌のある場所をよく認識している。



ウスカワマイマイは殻径が20mmほどの大きさで、殻高が高いのが特徴。家庭菜園では野菜の大敵。

オカチヨウジガイは殻高8mmほどの小さなカタツムリ。軟体部は黄色くてかわいい。

ナミコギセルは殻高が17mmほど。キセルガイの仲間では人家周辺で最も普通に見られる。近年増加傾向にある。



オナジマイマイは殻径が14mmほどあり、殻は黄白色。臍孔は半分ふさがれる。外来のカタツムリで、見られる場所は比較的片寄っている。

コハクオナジマイマイは殻径が15mmほどの国内外来種。軟体部が黄色く透けて見えるのが特徴。本種は1年生で、成体は秋に産卵したのち死滅する。

土の中の生き物

落ち葉の下や土の中には、私たちの全く知らない別の世界があります。枯草や落ち葉を出発点にして、草食動物や肉食動物がいて、それらを分解する菌類の世界へも繋がっています。



オカダンゴムシは、おそらく小さな子どもが最初の遊び相手にする生き物。畑では発芽したての芽を食べてしまう。卵は親が幼生になるまで腹に抱えて守る(右)。

トビムシの一種は体長2mmほど。多くの種類があり、名の通り体長の数十倍の跳躍ができる。



暗紫色のトビムシの一種は体長が4mmもある大型のトビムシ。直射日光の当たる場所に群れていた。



白く波状に動くハリガネムシの一種。直線にすると20cmほど。どのような生活史を送るのかはまったく分からぬ。



アメイロアリは体長2~2.5mm。林床や土中に普通に見られ、腹部には淡色の帯がある。秋に生まれた羽アリは巣内で越冬し、4月に飛び立つ。



コバネハサミムシは体長15mmほど。他の小昆虫を捕えて食べる肉食動物。



コウガイビルの一種は扁形動物門に属し、プラナリア(第2集P22)に近縁。頭部は半月形。主にミミズを捕食していると思われる。



ヨコエビの仲間は種類が多く、海水、淡水、土中などに生息する。体を横にして跳ねることができる。

ミミズの一種は腐葉を食べ、土をつくる。土に空気を通す大切な役目を担う。



ワラジムシはオカダンゴムシに似るが、体を丸めることはできない。